

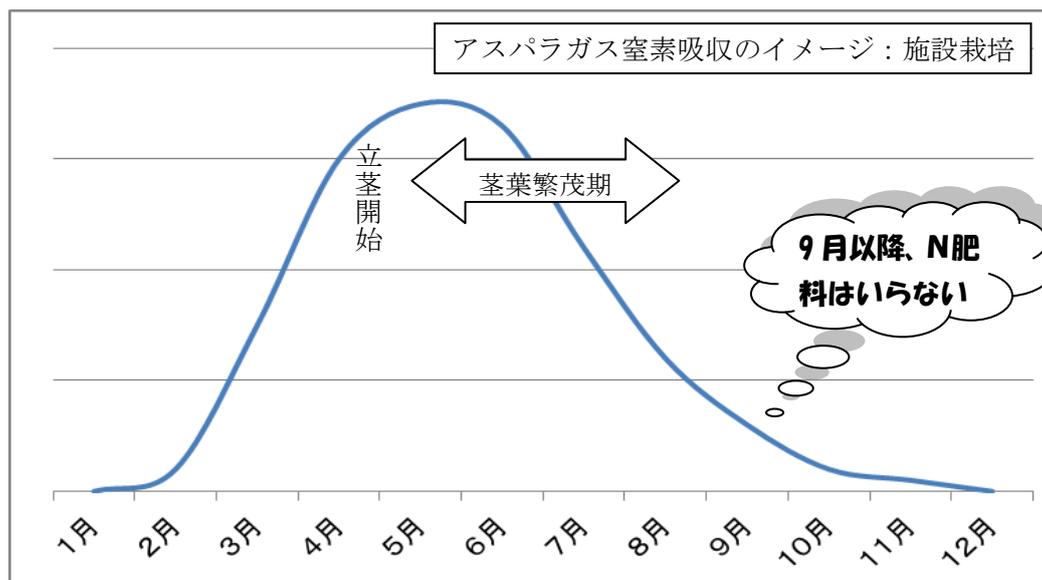
25 アスパラガス

地域慣行基準

【化学肥料】

区分	窒素成分量 【kg/10a】	備考
県下全域	30	

※新植・改植の植え付け前の前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。



(1) 特徴及び吸収特性

アスパラガスは多年生で定植後は長年収穫できるが、**一度定植するとその後の本格的な土壌改良が難しい**ため、定植時の土づくりが大切である。アスパラガスで同化した養分を一旦貯蔵根中に蓄え、その後春先の若茎の生育に使われる。

土壌養分の**吸収は立茎開始直後から茎葉繁茂期にかけてが最も盛ん**である。この時期は主に茎葉部に養分が吸収され、収穫物である若茎に吸収される量のおよそ3倍になる。**窒素は立茎初期の吸収量が著しく増加**する。カリの吸収量は生育全期間を通じほぼ直線的に増加する。300～400kg/10a程度の収量を得たときの養分吸収量は10a当たり窒素12～14kg、リン酸2～4kg、カリ16～24kg（成園）程度である。

茎葉繁茂期の施肥は、**初期には茎葉を十分に生育させるために窒素を効かし、中期は過繁茂を抑える**ために抑え気味とし、**後期は茎葉の活性を低下させない程度**とする。茎葉繁茂期の施肥を遅くまで行くと**貯蔵養分の蓄積に悪影響**を及ぼす。半促成栽培の試験事例では、基肥の窒素施肥配分は3月肥30%、5月肥50%とし、追肥として7月肥20%が良いとの普及技術がある。